ノーベル賞文学全集

NOBEL PRIZED LITERATURE

後援

スウェーデン・アカデミー

ノーベル財団

This collection of
the Nobel Prizes in Literature
is edited under
the patronage of
the Swedish Academy and
the Nobel Foundation.

ノーベル賞文学全集　2

ロマン・ロラン
イェンセン

訳者　宇佐見英治
河盛好蔵
山口三夫
竹内孝次

授与演説および受賞演説の収録に際しては、集英社のご厚意を得ました。

昭和45年12月5日　発　行

発行者／石川数雄
発行所／株式会社主婦の友社
東京都千代田区神田駿河台1-6
郵便番号　101
振替　東京180番
電話　東京294-1111(大代表)

印刷所／凸版印刷株式会社
製本所／寿製本株式会社
大口製本印刷株式会社
本文用紙／本州製紙株式会社
表紙／日本クロス工業株式会社
クロス
製函／凸版印刷株式会社

© 主婦の友社　1970　Printed in Japan

0397-522021-3062

目次

ヘルマン・ヘッセ

選考経過…シェル・ストレムベリイ……高橋健二訳…6
授与演説…アンダーシュ・エステルリング……高橋健二訳…9
受賞演説……高橋健二訳…12

シッダールタ……高橋健二訳…13
春の嵐……高橋健二訳…73
車輪の下……高橋健二訳…165
青春は美わし……高橋健二訳…251

人と作品…ゲオルク・テューラー……高橋健二訳…273
著作目録……高橋健二編…408

パウル・ハイゼ

選考経過……グンナー・アールストレーム……久米あつみ訳…290
授与演説……C・D・af・ヴィルセーン……浜田正秀訳…295

ララビアータ（片意地娘）……小塩　節訳…299

ぶどう園の番人……小塩　節訳…313

復　活……小塩　節訳…367

人と作品……ジュヌヴィエーブ・ビアンキ……小塩　節訳編…401
久米あつみ訳編
著作目録……小塩　節編…412

肖像画／ミッシェル・コーヴェ
カラーさしえ／ハンス・エルニエ（ヘルマンヘッセの作品）
エーメ・スタインレン（パウル・ハイゼの作品）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ヘルマン・ヘッセ

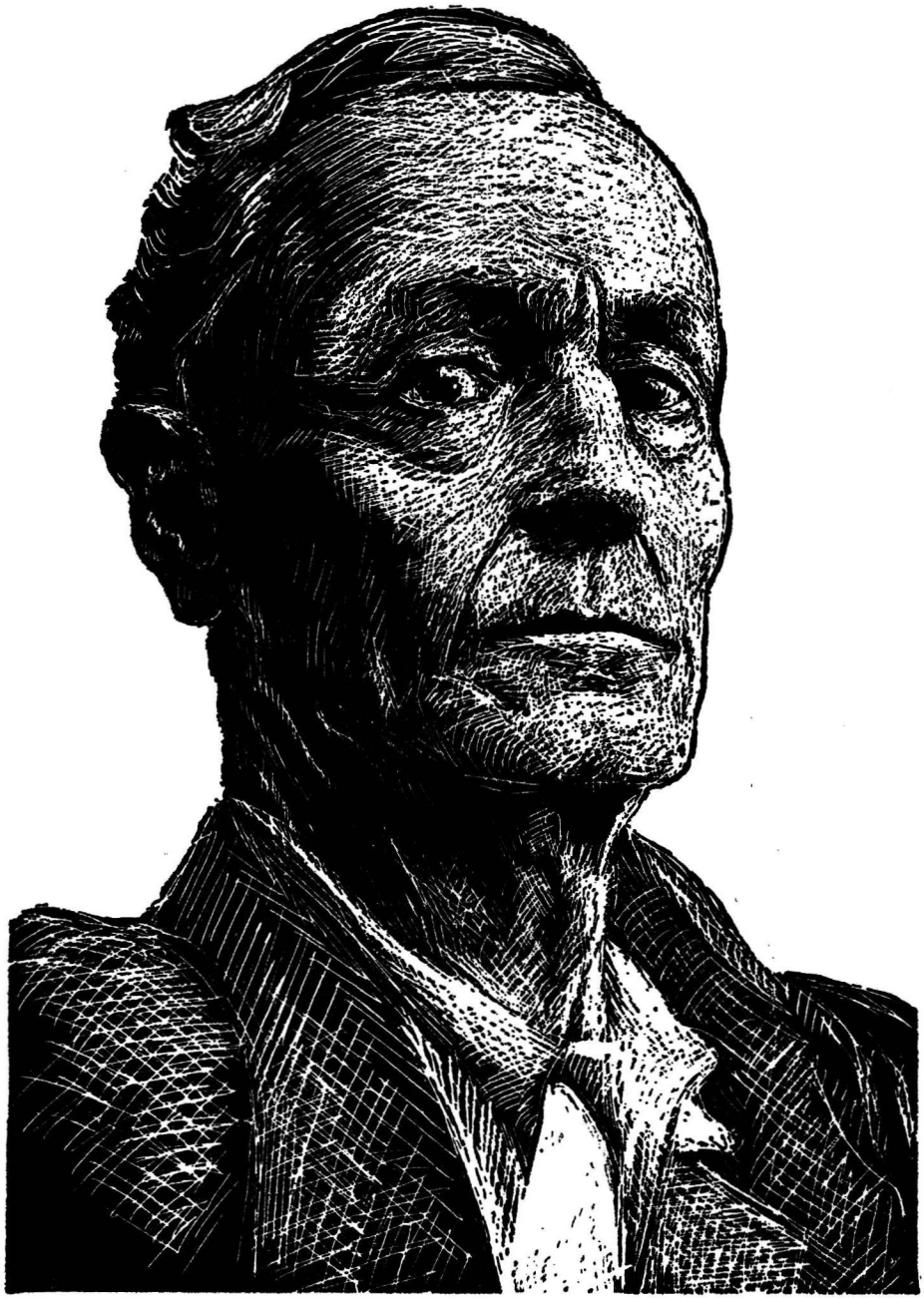
一九四六年受賞（七十歳）

シッダールタ

春の嵐

車輪の下

青春は美わし



H Hesse

ヘルマン・ヘッセ

選考経過

授与演説

受賞演説

ヘルマン・ヘッセに対する ノーベル文学賞授与の選考経過

元パリ駐在スウェーデン大使館
文化参事官
シェル・ストレムベリイ

第二次世界大戦の直前の数年間、ノーベル文学賞委員会に提出された候補者の名簿は、だいたいにおいてたいした変化を示さなかった。年々同じ名前が、授賞者の最高会議によって引き止められる機会がないと、死亡のため消されてしまうまで、重ねてあらわれてきたものである。まれな例外を除いて、幸運な当選者は、長い年月の間、控えの間で待機していた。絶えることなくつづいている受賞者のつながりの間に戦争のため生じた四年間の空白によって、提案の権利を有する諸アカデミーと大学のわくがいくらか更新されたように思われる。なぜなら、平和回復の最初の年、一九四六年以後新しい候補者はおびただしい数にのぼり、以前の人たちと競い合うことになったからである。この年から推薦された新しい候補者の中に、五人の未来の受賞者――二人のフランス人、すなわちアンドレ・ジッドとフランソワ・モーリヤック、二人のイギリス人、すなわちT・S・エリオット（すでに前年からの候補者）とウィンストン・チャーチル卿、最後に一人のロシア人、すなわちボリス・パステルナークの名も見られる。

しかしながら、一九四六年度のノーベル文学賞を堂々とかちとったのは、少なくとも十五年来かなり注目されていた「古参者」ヘルマン・ヘッセである。一八七七年生まれのドイツ出身でスイス市民であるこの作家は、一九二九年度のノーベル文学賞受賞者、トーマス・マンの世代に属している。ヘッセはしばしばマンに比較されるが、それは、両大戦間、とりわけ彼ら共通の祖国の新しい支配者によってきわめて露骨に愚弄された西欧ヒューマニズムの代表者として、また雄弁な擁護者としてである。このような、こころよく受けとられる比較では、この有力な作家の影に多かれ少なかれおおわれているヘッセの作品を容易に正当に評価しえないのは明らかであるが、トーマス・マン自身は、彼の二才年少者の価値をほめる機会をけっして逸しはしなかった、としるしておいたほうがよかろう。したがって、トーマス・マンは、ヘルマン・ヘッセを高度の文学表彰に立候補させることになった最初の人であった。そして、結局、ヘッセにそれが認められることになった。他方、ヘッセ――彼の父方の祖父はバルト海沿岸の出であり、母方の祖父はスイス系フランス人であった――は、第一次世界大戦以後、ドイツの指導者と公然とたもとをわかった。彼はスイスに住居を定め、一九二三年、スイスに帰化したのであるが、これが原因となって、ヒトラーの出現、ナチ政権の確立以前でさえも、彼の作品がドイツの領土に普及するのに不利な結果をもたらすこととなった。彼の作品は、おそらくスカンジナビア諸国を除いて、世界の他の地方においては、フランスでもイギリスでも部分的に翻訳されてはいるが、ノーベル文学賞を授与されるまでは、ゲルマン領域以外の地ではほとんど知られていなかった。

一九三一年の日付を有する、ヘッセの作品に関する最初の報告の中で、当時のスウェーデン・アカデミーの常任理事、ベール・ハルストレーム博士は、ドイツの批評家の一般的意見に反対して、ヘルマン・ヘッセは、まず第一に、小説家や哲学者ではなく、彼の本質的作品はたしかにきわめて入念な文体で書かれた短編形式で表現されてはいるが、それにもかかわらず、彼は個人的問題をもっぱらとり扱っている叙情詩人であると、極力主張している。彼の初期の作品、とりわけ『ペーター・カーメンチント』と『車輪の下』、ともに第一次大戦前の日付を有するこの二作においては、報告者の言のごとく、スイス農民生活の古典的な歌い手、ゴットフリート・ケラーの顕著な影響が認められる。ヘッセが、彼の真の独創性をあらわしたのは、一九二〇年代に書かれた偉大な長編小説、とりわけ『デミアン』（一九二〇年）、ことに『荒野のおおかみ』（一九二七年）においてであろうが、そこでヘッセは大戦争のあとに西欧世界を引き裂いた良心の深い危機を論じている。

後者「荒野のおおかみ」は、ホフマン、ニーチェ、フロイト、ドストエフスキーのテーマが交錯している新しい方式の一種のゲーテ的教養小説であり、彼の全作品中の一つのピークと見なされている。

押えきれないほどの称賛の念にもかかわらず、この報告者は、あらゆる種類の誘惑や破壊の力にさらされた人間の魂を示しているところの、人の心を不安にさせるこの作品が、故ノーベルが彼の賞によって勇気づけようとした文学的、精神的傾向と真に一致するものであるとは、確信していない。――「もしダイナマイトの発明者が、ただ人間の思想を盲目的に爆破させる悪の本能をほめたたえようと欲したのでないとすれば」――要するに、この報告者は、その魂と良心の中で、「文学的業績に対するスウェーデンの偉大な世界的賞」にトーマス・マンの推す候補者を無条件で推薦することはできなかったのである。こうした次第で、『ブッデンブローク一家』や『魔の山』によってすでに賞を受けていたトーマス・マンは、ヘルマン・ヘッセの六十才を祝うために『新チューリヒ新聞』(一九三七年七月二日)に出された、とりわけ称賛に満ちた評論の中で、ノーベル賞を求めたのである。彼は、旧友のために、追放された同志のために、『荒野のおおかみ』の、彼の意見では不当に真価を無視されている作者のために、今度は正式にその賞を請求したのであった。

ベール・ハルストレーム博士は、ヘッセの大部の諸著作を、幾度か繰り返し読むことに没頭した。そしてそれを理解した。ところで、彼の意見を変えさせたのは、ヘッセの晩年の主著、一九四三年刊行の一〇〇〇ページの大河小説『ガラス玉演戯』でさえなかった。仕事と思考の十年の円熟した成果を示している、人間の未来を描いたこの黙示録的ヴィジョンは、そのうえあまりにも神秘的な象徴主義から成っていたため、小さなスイスの限られた公衆の注意を引き止めることにはならなかった。スイスは、大戦の最中には、ほかに多くの心配ごとをかかえており、この過度の厭世主義に直面するのを好まなかった。ドイツの販路は、といえば、大戦の初め以来、ヘッセにきびしく閉ざされていたのである。

要するに、ヘルマン・ヘッセがスウェーデンの判定者に頭を下げさせたのは、むしろ同じ時期(一九四三年)に集大成され刊行された叙情詩によってである。この詩、特に近年の日付のある詩こそ、エステルリング氏や、多少その道に通じたアカデミー委員の意見では、現代ドイツ語で生み出された最も完全なものを示している、というのであった。アカデミーは、純粋な詩が、それに対して敵意をいだく風土でなお開花したところで、純粋な詩に報いるという願望に燃えたので、もっとよい機会と、その願望をよりよく満足させるに値する対象を、ほとんど見いだすことができなかったのであろう。この徹底的な検討の結論はこうだったのである。詩も散文もすべて十分に検討されたあげく、一九四六年度の賞をヘルマン・ヘッセに授与することに意見が一致した。それは「さまざまの面で、古典的ヒューマニズムと最も高い価値の書き方とを同時に示している、霊感に満ちあふれた、大胆でかつ深いヘッセの作品に対して」なされたのである。

いたみやすい健康と重い病気のため、ヘルマン・ヘッセは、ルガーノ湖のほとり、テッシンのサナトリウムに引きこもった。そこを晩年の永住の地と定めた。彼が受賞の思いがけない知らせを知ったのは、そこにおいてであった。彼は賞を受けとるためにストックホルムにおもむくことができなかった。賞は、スイス連邦の文学に明るい大臣、アンリ・ヴァロトン氏に、スウェーデンの首都で手渡された。エステルリング氏は、スウェーデン・アカデミーの同僚にかわって、公式に賛辞を述べて、ヘッセを、シュテファン・ゲオルゲとライナー・マリア・リルケなきあと、「ドイツ語を用いた現代の最も偉大な叙情詩人」と呼んだ。詩人の使命に常に誠実な善意の人として、またおびやかされた人間の理想を求める戦士として、ヘルマン・ヘッセは、ニーチェやドストエフスキーと共通の、また同じく仏陀やアシジの聖フランシスと共通の性格の特徴を示すものであろう。

公式の授与式に引きつづいて行なわれた祝宴の間に、スイスの大臣によって読まれた感謝のメッセージの中で、ヘルマン・ヘッセは、自分はノーベル財団の中に形成された理念、すなわち「精神は国籍を越え、国際的であるという思想、精神の責務は戦争と破壊にではなく、平和と和解に奉仕すべきであるという思想」の熱烈な信奉者であると

述べた。その年の受賞者であるヘッセに与えられた賞は、個人に敬意を表するよりは、むしろ共通の文明に対してドイツの貢献がなお演じることのできた役割を承認することを意味していた。換言すれば、世界のすべての国民に精神的協力への道を再開することを可能にする精神的宥和の態度を意味したのである。

ヘッセの主要作品の五つないし六つは、彼の受賞の前に翻訳されていたのだが、彼の名が実際に広まったのは、このできごとのあとのことである。彼のおびただしい作品は、五十の題名を有しており、それらは国際的な批判によって検討され、新大陸においても、旧大陸においても、極東においてまでも、大学の講義で注釈されている。日本がこの翻訳の数に関しては記録を保持しているように思われる。ヘッセの作品にささげられた博士論文の数に関しては、アメリカが西ドイツに次いで第二位を保っている。フランスでは、ロマン・ロランとアンドレ・ジッドが彼の友人であり、長い年月の間、忠実な文通者であった。ジッドは一九三二年に刊行された『東方巡礼』のフランス語訳に序文を書きさえしたが、さらに、ノーベル文学賞受賞者名簿に、ヘッセの名のすぐあとに、自分の名をしるすことになった。（高橋健二訳）

ヘルマン・ヘッセに対する ノーベル文学賞授与に際しての歓迎演説

スウェーデン・アカデミー常任理事
アンダーシュ・エステルリング

一九四六年十二月十日

陛下
閣下
淑女
紳士諸君

今年のノーベル文学賞は、大衆の人気を眼中におかずに創作し、広く識者に迎えられたドイツ生まれの作家に授与されることになりました。六十九才のヘルマン・ヘッセは、顧みると、長短編の小説と詩から成り立つ顕著な業績をあげております。その一部はスウェーデン語訳でも手に入ります。

彼は、他のドイツの作家より早く政治的圧迫からのがれ、第一次大戦の間にスイスに定住し、一九二三年にその国籍を得ました。しかし、彼の血統と個人的な関係がいつもヘッセ自身をして、みずからをドイツ人であると同様にスイス人であると考えさせたことを、見のがしてはなりません。戦争の間、中立だった国に避難していたため、彼は重要な文学的な仕事を比較的しずかにつづけることができました。現在（一九四六年）ヘッセは、トーマス・マンとともに、現代文学におけるドイツ的文化遺産の最もすぐれた代表者であります。

多数の作家にも増して、ヘッセについて、彼の人格を作り上げている目をみはらすような諸要素を理解するためには、彼の個人的背景を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

知らなければなりません。彼はシュワーベンの厳格な敬虔主義の家庭の出身です。彼の父は教会史家としてよく知られていました。母は布教師の娘で、フランス人の血筋を受け、インドで教育されました。ヘルマンが牧師になるだろうということは、当然のことと考えられていました。それで、彼はマウルブロンの修道院の神学校に送られました。が、そこから逃げ出し、大時計の歯車を作る町工場の徒弟となり、のちにはチュービンゲンとバーゼルの本屋で働きました。

受け継がれた信仰心に対する少年らしい反抗にもかかわらず、信仰心は絶えず彼の人となりの底に残っていたのですが、一九一四年、ひとかどの人物として、郷国で著名な作家として、彼が、それまでの牧歌的な道から遠く離れた新しい道を歩き出したときに、あの反抗は苦悩に満ちた内面的危機において繰り返されたのであります。要約すると、ヘッセの創作に深い変動を引き起こした二つの要因があります。

その第一は、もちろん世界戦争でした。大戦の初めに、興奮している同僚に対して、彼は平和と沈思のことばを語りたいと思って、小さい評論の中で「おお友よ、その調子をやめよ」というベートーベンのモットーを使いました。それが抗議のあらしを巻き起こしました。彼はドイツの新聞から野蛮な攻撃を受けました。そして明らかにこの経験によって深いショックを受けました。彼はそれを、彼が長い間信じていたヨーロッパの文明全体が病み、退廃している証拠と受けとりました。救いは、既存の規範のかなたから、おそらく東方の光から、より高い調和における善悪の決定の奔放な理論の中に隠れた核心からこなければなりませんでした。病気になり、懐疑に悩まされて、彼は、当時熱心に説かれ臨床に用いられていたフロイトの精神分析に治癒を求めました。それは、この時期のヘッセのいよいよ大胆になっていく著作の中に、持続的な痕跡を残しました。

この個人的な危機は、空想的な小説『荒野のおおかみ』(一九二七年)の中に壮大な表現を見いだしました。これは、人間性の中の分裂と、日常生活の社会的道徳的観念の外にいる一個人の願望と理性の間の緊張とを天才的に描き出した物語であります。家庭を持たず、おおかみのように追われて、神経病に悩まされている男のこの奇怪な物語で、ヘッセは、たぐいまれで爆発的な本を創作しました。それは危険で、たぶん不吉な本ですが、同時に、皮肉なユーモアと詩とを織りまぜて主題をとり扱うことによって、解放感を与えます。現代の諸問題がきわだってとり上げられているにもかかわらず、ヘッセはこの作品でも、ドイツの最上の伝統を保持しつづけております。このきわめて暗示的な小説が最も強く想起させるのは、『悪魔の霊薬』の巨匠E・T・A・ホフマンであります。

ヘッセの母方の祖父は、有名なインド語学者グンデルトでした。こうして、この作家は幼年時代にもうインド人の英知に引きつけられるのを感じました。中年になって願望の国に旅行しましたが、実際、彼は人生のなぞを解くことができませんでした。が、仏教の影響がまもなく彼の思想にしみ込みました。その影響は、『シッダールタ』(一九二二年)、すなわち、地上における生の意味を探究する若いバラモンの美しい物語――に限られるものではありません。

ヘッセの作品は、仏陀と聖フランシスからニーチェとドストエフスキーに至るまでさまざまの影響をとり入れているので、彼は本来種々な哲学の折衷派的実験者であるかと疑われるほどであります。しかし、この意見は全く誤っているでしょう。彼の誠実さと真剣さは、作品の基礎であり、きわめて異常な主題をとり扱うときでさえ、はめをはずすことがありません。

彼の最も完成した小説の中で、われわれは彼の人格に、直接にもまた間接にも直面いたします。彼の文体は常に感嘆に値するものでありまして、反抗と魔精的忘我状態においても、しずかな哲学的冥想においてと同様に完成の域に達しております。イタリアにのがれて最後のチャンスを求める自暴自棄の横領犯人クラインの物語と、『思い出草』におけるなき弟ハンスについてのすばらしくしずかな叙述とは、彼の創造力の異なった領域のみごとな例であります。

ヘッセの晩年の作品の中では、巨大な長編『ガラス玉演戯』(一九四三年)が特殊な地位を占めています。これは、神秘的知的教団についての空想であって、イェズス会のそれと同じ雄々しく禁欲的な地盤の上に立ち、治療法の一種としての冥想の修練にもとづいております。この小説は目をみはらすような構成を持っており、その中での遊戯の概念と文明の中での遊戯の役割が、オランダの学者ホイジンガの独創的な研究『ホモ・ルーデンス』(遊戯人)と驚くほど類似しております。ヘッセの態度は二重の性質を持っています。衰退の時期には、文化的

伝統を保持することが、彼のたいせつな課題であります。しかし、文明は、少数者のための礼拝に転化することによって永続的に生命を保たさせられるというわけにいきません。もし知識の多様性を公式の一つの抽象的な体系に変えることができるとすれば、われわれは一方で、文明が一つの有機的な体系にもとづくという証拠を持つことになり、他方では、この高い知識は永続的ではありえないということになります。それはガラス玉と同様にもろく、壊れやすいものです。割れたれんがの中にきらきら光る真珠を見つける子どもには、もはやその意味がわかりません。この種の哲学的小説は、難解だといわれる危険におちいりやすいのですが、ヘッセはこの本のモットーの中の温雅な数行でそれを防いでおります。「……ある点では、そして思慮の浅い人々にとっては、現実的に存在しないもののほうが、存在するものより、ことばによって表現するのに、容易であり、責任を伴わないかもしれないが、敬虔で良心的な歴史家にとっては、まさにその反対である。すなわち、ある事物の現実的存在は証明することができないし、ほんとうらしくもないとしても、敬虔な良心的な人々が、それをある程度存在するものとしてとり扱うことによって、存在と生起の可能性に一歩近づけられるような事物がある。そういう事物ほど、ことばで表現しにくいものはないが、また、そういう事物ほど、人々の目の前に示してやる必要のあるものはない。」

ヘッセの散文作家としての名声が変わることがあるとしても、詩人としての高さについては疑いの余地はありません。リルケとゲオルゲの死以後、彼は現代の第一級のドイツ詩人です。彼は文体のえり抜きの純粋さと感動的な情緒のあたたかさを兼ね備えています。彼の音楽的な形式は当代無比であります。ゲーテ、アイヒェンドルフ、メーリケの伝統を受け継ぎ、彼は彼独特の色彩によって詩の魔術を更新させています。彼の詩集『夜の慰め』(一九二九年)は、彼の内的なドラマ、彼の健康な時間と病める時間、きびしい自己追求ばかりでなく、生活への献身、絵をかく喜び、自然の礼拝をもまた、なみなみならぬ明澄さをもって反映しています。そのあとの詩集『新詩集』(一九三七年)は、いわば秋の知恵と悲しい経験に満ちており、イメージとムードとメロディーとにかけて高度の感受性を示しております。

この作家をわれわれにとって特に魅惑的にする多彩な性質、当然のことながら忠実な礼賛者を作った多彩な性質を、簡略な前おきで正当に評価することは不可能であります。彼は問題的な告白的な詩人であって、南ドイツ的な気質をゆたかに備えております。そしてその気質を、自由と敬神とのきわめて個性的なまざり方で示しております。もし、抗議への熱情的な傾向を、また問題になっている事柄が彼にとって神聖である場合は、ただちに夢想家を戦う人に変える常に燃えつづける火にこだわらないならば、彼をロマン的詩人と呼んでもよいでしょう。ある個所でヘッセは、現実にけっして満足してはならない、現実を礼賛したり崇拝したりしてはならない、と言っております。この低級で、常に失望させる荒涼たる現実は、われわれのより高い力を証明することによってそれを否定する以外には、変えられえないからです。

ヘッセの受賞は、彼の名声の確認以上のものであります。戦い通したりっぱな人、まれなる誠実さで自己の使命に従い、悲劇的な時期に真のヒューマニズムの武器を打ちつづけることに成功した人のイメージを終始一貫示している文学的業績に、それは名誉をささげるものであります。

あいにく、健康上の理由で、詩人はストックホルムに旅行してくることができません。彼にかわって、スイス連邦共和国の使節が賞を受けとられます。

(ヘルマン・ヘッセの代理、スイス国大臣アンリ・ヴァロトン博士に向かって)

閣下、国王陛下の手から、貴国のヘルマン・ヘッセにスウェーデン・アカデミーによって授けられる賞をお受けとりくださるようお願いいたします。

(高橋健二訳)

受賞演説

代理
スイス国大臣
アンリ・ヴァロトン

ヘルマン・ヘッセが病気のためスイスを離れられないのを、心から残念に存じます。しかし、彼の思いは私たちとともにあります。彼の感謝の念は、皆さまの前で読むよう彼から私に託された次のメッセージに言いあらわされております。

「ノーベル祝典に際する祝宴へのことば

皆さまのはなやかな会合に際し、心からうやうやしく敬意を表するとともに、何よりも、私自身出席してごあいさつとお礼を申し上げることができないことについて、遺憾の念を表明いたします。私はいつもきわめていたみやすい健康状態にありました。そして、一九三三年以後の十余年間、私の全著作がドイツで破棄されたため、私は絶えず重い義務を負わされて、その過労によって、全く病みつづけてしまいました。しかし、精神的にはくじけておりません。そして、とりわけノーベル財団の根本にある思想、すなわち、精神は国籍を越え、国際的であるという思想、精神の責務は戦争と破壊にではなく、平和と和解に奉仕すべきだという思想によって、私は皆さんのすべてと結ばれているのを感じます。私に与えられた賞が同時に、ドイツ語と、文化へのドイツ的寄与との表彰を意味する点に、すべての国民の精神的協力の道を再び開こうとする和解と善意の姿勢を認めます。

しかし、私の理想は、精神的に画一化された全人類のために国民的性格を消し去ることではけっしてありません。いえいえ、わが地球上に多様さと変化と色合いとがいつまでも存在しつづけますように！人種、国民、言語、気質や世界観の変種などがたくさんあるのは、すばらしいことです。私が戦争を憎み、戦争や征服や合併とは相いれない敵であるのは、わけても、歴史的にできたもの、高度に個性化されたもの、人類の文化の多種多彩なものが、それらの暗い力の犠牲になるという理由からです。私は『大いなる単一化』の敵で、質と、みがき上げられたものと、模倣できないものとを愛好するものです。それゆえ、私は感謝の念に満ちた客として同僚として、あなたがたの国スウェーデンに、その言語に、文化に、ゆたかで誇らしい歴史に、生来の特性を保持し完成することにかけての抵抗力に、敬意を表します。

私はスウェーデンに行ったことはついぞありませんが、もう数十年来あなたがたの国から、かずかずの友情がこもったうれしいものが私のもとに届けられました。私のスウェーデンから受けとった最初のプレゼントは、たぶん四十年前のことですが、スウェーデンの本で、セルマ・ラゲールレーヴの自筆の献辞のついた『キリスト伝説』の初版本でした。この数年間、私はあなたがたの国といろいろの価値ある交換をしてきましたが、今回はからずも大きなプレゼントを受けることになりました。私の深い心からの感謝を表白いたします。」

受領に先立って、王室科学アカデミーの院長シグルド・クルマン氏が次のように述べた。

「ヘルマン・ヘッセは、文学の領域において魂の細菌に対する戦いをつづけました。この泥沼から脱する道を私たちに示すために、すぐれた文体の詩と小説によって努力しました。彼は私たちみんなに向かって、『ガラス玉演戯』の中の若いヨゼフ・クネヒトのモットーを叫びかけます。『踏み越えよ！』前進せよ、より高く登れ、君自身に打ち勝て！　と。――人間的であるとは、救いがたい二元性を耐え忍ぶこと、善悪の両者に向かって引かれることだからです。そして、私たちは、自分の内部の利己主義を倒したときに初めて、調和と平和とを達成することができるのです。それが、東西から自己弁護のわめき声を響かせている荒廃した時代の人々に対するヘッセのメッセージです。ヘッセがノーベル賞に値するのは、主として、その小説において深い哲学者であり、現代の大胆な批評家であるからであります。」

（高橋健二訳）

シッダールタ

SIDDHARTHA

高橋健二訳

目次

第一部
バラモンの子……15
沙門たちのもとで……19
ゴータマ……24
目ざめ……28
第二部
カマーラ……31
小児人たちのもとで……38
輪廻……42
川のほとりで……46
渡し守……52
むすこ……58
オーム……63
ゴーヴィンダ……66

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com